日本カレドニア学会　Japan Caledonia Society

Newsletter

No.57　OCTOBER 2016

カレドニア(CALEDONIA)はスコットランドの雅名
その国花は薊(あざみ)

デジタル化と中世スコットランド史研究

西岡　健司

2015 年 8 月下旬、短期の資料調査のためにエディンバラを訪れていた私は、スコットランド国立図書館(NLS)のスペシャル・コレクション閲覧室で、思いがけない朗報に接した。いつもの通り、注文した中世の写本をカウンターに受け取りに行くと、対応してくれた司書が、「ご自身で写真撮影をなさいますか」と尋ねてきたのだ。訊けば、閲覧者自身による所蔵資料の撮影の是非を判断するために、9 月まで試験的にカメラの使用を許可しているという。私は喜び勇んで宿泊先にデジタルカメラを取りに戻り、時間を惜しんで夢中でシャッターを切り続けた。

閲覧室でのカメラの使用は、すでにロンドンの国立文書館(TNA)やエディンバラのスコットランド国立文書館(NRS)で数年前から認められており、ロンドンの英国図書館(BL)もそれに続いていた。遅ればせながら、その後 NLS が最終的に認可の決定を下したことで、中世スコットランド関係の資料の多くを所蔵する主要 4 施設すべてにおいて、研究者自身による写真撮影が可能になったことになる。所有権や資料保護などの関係で撮影が制限ないし許可されない場合もあるが、頻繁に文書館に足を運ぶことができない海外の研究者にとっては、研究の幅が格段に広がることになるだろう。

写本のデジタル化の傾向は、近年の中世史研究における写本の重要性の再認識とも軌を一にしている。中世スコットランド関係の資料の多くは、19 世紀にバナタイン・クラブやメイトランド・クラブといった好古家協会によって出版されたが、20 世紀の歴史学研究の進展に伴って、編纂の問題点が多く指摘されるようになり、写本自体に立ち返る必要性が高まってきた。そうした状況の中でひとつの解決策を提示したのが、2007 年に出版された新版の『メルローズ年代記』第 1 巻である(Dauvit Broun and Julian Harrison eds., *The Chronicle of Melrose Abbey: A Stratigraphic Edition. Vol I: Introduction and Facsimile*, Woodbridge, 2007)。本書には、年代記に関する詳細な解説とともに、写本の精密なデジタル画像を収めた DVD が付属しており、自宅にいながら写本を参照することを可能にした。もっとも、現在では写本を所蔵する BL が、さらにデジタル画像をウェブサイト(http://www.bl.uk/manuscripts/)で一般公開しているため、もはや DVD の必要もない。

所蔵資料のウェブ公開は、BL に限らず各地の図書館や文書館でも急速に普及している。中世スコットランド史関係でいえば、たとえば『ディアの書』(MS Ii.6.32)がケンブリッジ大学のデジタル図書館(http://cudl.lib.cam.ac.uk/)で公開されているほか、マドリードの王立図書館が所蔵する所謂『ダンファームリン写本』(II/2097)も、関連のウェブサイト(http://realbiblioteca.patrimonionacional.es/)で閲覧できる。NLS や NRS では中世関係資料の一般公開はまだ少ないが、前者のデジタル・ギャラリーは充実してきているし、後者でも館内閲覧では一葉ものの文書のデジタル化も進んできている。

写本の一般公開は驚くべき速度で進展しているため、やがては調査対象の写本をウェブサイト上で参照するのが当たり前の時代が来ることも予感させる。もっとも、いかに精密なデジタル画像であっても、古文書学的な分析を必要とする場合には、現物を手に取って調査する必要があることは言うまでもない。この点で、資料のデジタル化が進んだ場合に、原本への直接のアクセスを制限する傾向が加速することが危惧される。

ところで、ウェブサイト上でのデジタルデータの公開は、写本の画像のみならず、研究成果のデータベース化という形でも進展しつつある。たとえば、中世史研究の要の資料である証書(charter)に関しては、POMS のウェブサイト(http://www.poms.ac.uk/)で人物情報等を中心に作成されたデータベース(People of Medieval Scotland 1093-1314)が公表されているほか、短編の研究ノートなども掲載されている。あるいは、議会関係資料については、RPS (Records of the Parliaments of Scotland to 1707)のウェブサイト(http://www.rps.ac.uk/)で、原文テクストと英訳が参照可能である。

ここで紹介したのは、筆者自身が普段の研究で最も活用しているものを少しばかり取り上げたにすぎず、ほかにも貴重な資料や研究成果がウェブサイト上で多数公開され続けている。また、周知のとおり、研究論文に関しては、すでに電子ジャーナルがかなり普及しているうえ、かつては「未公刊の」という形容詞をつけて参照された浩瀚な博士論文も、PDF ファイルで読めるのが一般的となっている。研究の助けとなる材料が豊富に利用できるようになるのは歓迎すべきことであるが、膨大な情報をいかに処理していくかは悩ましい問題でもある。日進月歩で発達する情報技術を十分に活用しつつも、一方で、研究者が相互に情報を交換して協力する体制が一層必要とされているのかもしれない。(大手前大学)

スコッツ語と英語の関係性をどのように理解すべきか

横田由美

今日のスコットランドは多言語国家であると考えられているほど様々な言語が話されている(Jones, 2002:1-2)。その中で主要な言語は、スコットランド標準英語、スコッツ語、スコットランドゲール語の 3 つであると一般的に言われている。スコットランドゲール語はケルト系言語に属すという点において、その他の言語とは明確に異なる。英語とスコッツ語は共にゲルマン語系に属し、且つ共に古英語に起源があるので、互いに異なる言語要素もあるが本質的に関連のある言語である。加えて、言語使用領域についても、スコットランドゲール語は、おおまかに現在のケルト文化圏であるハイランドで話されている一方、スコットランド英語とスコッツ語は地理的使用領域が重なり合っている。であるから、そのふたつを異なる個別言語として分類するのか、それともスコッツ語はスコットランド英語の変種として捉えるのかはしばしば議論の的となり、その判断には多くの場合、政治的要素が影響を及ぼしている。

スコッツ語は元来スコットランド王国(843 年-1707 年)の言語であったが、16 世紀から 17 世紀の宗教改革の時代にその地位が揺らぎ始めた。そして 1603 年のイングランドとの同君連合樹立によって、更に 1707 年のイングランドとの合併によって、それまでの威信言語の地位を徐々に失い、代わりに英語が台頭してきたのである。その言語地位の入れ替わり以前にスコッツ語は英語とは異なった発展をし、異なった要素があるにも関わらず、同起源の為に言語的共通要素を有し、またイングランドと合併したことで多くの英語がスコッツ語に取り入れられた故に、英語の崩れた形として英語の下位区分へ落され、地方方言として感じられるようになったと考えられる。

スコッツ語は古英語（北部方言）が徐々にスコットランドの政治経済の中心地として発展を遂げる都市のある低地（ローランド）において、南に隣接するイングランドの英語とは離れて、独自にその地で進化したものであり特徴的な音、語彙、文法を備えている。一方、スコットランド英語は、スコッツ語とイングランドの英語（標準語と非標準語）が混成して誕生したものである。そしてその標準形とされるものは、スコッツ語の要素の度合いが薄くイングランド標準英語に非常に近いものである。

スコッツ語は英語と同起源であるため、そしてスコッツ語の基層上に英語が近代に収束されたため、多くの言語要素が類似しているのが事実である。しかし英語とは極端に異なっていて即座にそれだと認識できる特徴が話し言葉の中に現れる。それは発音組織と韻律（発話のリズム、強勢・抑揚など）であり、それらの特徴はスコットランド標準英語話者であっても同じである。しかし書き言葉においては英語との区別が付け難い場合がある。スコッツ語はその特徴的な語彙と文法によって容易にそれだと分かる一方、スコットランド標準英語は他の国々の標準形とは明らかな相違が分かりにくい。従って、スコッツ語とスコットランド英語に多くの共通な言語要素があるにも関わらず個別の言語として捉える者は、最も特徴的に濃いスコッツ語の形であるブロード・スコッツ(Broad Scots)のみに焦点を当て、それをスコッツ語として扱うことを好むようである(Corbett et al 2003: 2)。しかし英語の歴史的研究者である Jones (2002: 1)は現代における運用面に着眼し、「多分最も中立的な定義」と前置きをした上で次のように述べている。

> … modern Scots is as the principal linguistic medium of face-to-face [and written] communication used by the vast majority of speakers who live within the boundaries of Scotland today.

つまり彼によると、現代スコッツ語とは今日のスコットランドに住んでいる大多数の人が相対して話したり書いたりして意思伝達する際に用いられるものということである。このようにかなり大きな枠組みで捉えていることから推測出来るように、Jones はスコッツ語とスコットランド英語の厳密な区別をしていないのである。そうではなくて、そのふたつをスコットランドで一般的に非常に多くの人によって話されている言語、つまり現代スコッツ語として統一し、その中にスコッツ語の要素が非常に濃く現れているブロード・スコッツとスコットランド標準英語を含めている(2002: 5, Corbett et al 2003: 1)。そして、そのふたつは言語的に繋がっている二極の言語連続(a bipolar linguistic continuum)の状況であるとしている。その連続の一方の端にブロード・スコッツが位置し、もうひとつの端にはイングランド標準英語に近いスコットランド標準英語が位置しているとしている。ブロード・スコッツ（A 点）とスコットランド標準英語（B 点）が直線上の連続体であるという概念が示唆するものは、A 点に近ければ近いほど語彙、発音、文法などにおいて非常にスコッツ語の濃いものとして現れ、反対に B 点に近くなればなるほど世界の英語標準形と多くの共通点を分かち合うものとして現れるということである。よってスコッツ語話者は時と場合によりどっちの要素を自分の発話に入れるか取捨選択しているのである。

今日のブロード・スコッツは地域方言—中でもその要素が非常に濃いものは本土北東部や南東部—とアバディーン、ダンディ、エジンバラ、グラスゴーのような都市の労働者階級の間で見受けられる(Jones 2002 63)。また、スコットランド標準英語とは単にイングランド標準英語を模倣したものではなく、それ自身が少なくとも 18 世紀から音声的妥協や語彙進化しスコットランドの威信をもった形に変容したものである(Jones 2002: 24)。それは中部ベルト地帯の都市エジンバラのモーニングサイド(Morningside)、やグラスゴーのケルビンサイド(Kelvinside)のような一部地域で話されており、比較的に標準イングランド英語に近いものである。以上のように大きな枠組みの中にスコッツ語とスコットランド英語を含め、それを現代スコッツ語とすることが、多々ある言語の複雑な様相を体系的に理解するための礎になるであろう。

引用文献

Corbett, John et al (ed). 2003. *The Edinburgh Companion to Scots*, Edinburgh:Edinburgh University Press.

Jones, Charles. 2002. *The English Language in Scotland: An Introduction to Scots*, East Linton: Tuckwell Press.

（東京家政大学）

◆2016 年度第 1 回研究会報告

2016 年度第 1 回研究会は、2016 年 7 月 16 日（土）13 時 30 分より、同志社大学寒梅館 6 階会議室において開催された。参加者は途中からの方も含めて 15 名、楕円形に配置されたテーブルを囲んで、アットホームな雰囲気の中で進行した。プログラムは、岩瀬ひさみ氏（比較民話の会）の話題提供「Rannsachadh na Gàidhlig（ラーンサハク・ナ・ガーリック）2016 年レポート」、ノーマン・ジェイムズ・アンガス氏（京都橘大学）の話題提供「The Fantasy Realized— an outline of the University of the Highlands and Islands Project」（「実現した夢—ハイランズ・アンド・アイランズ大学構想の概要—」）、そしてミニ・ケイリー「ゲール語の子守唄を歌おう」である。

岩瀬氏のお話は、ご自身が 6 月下旬に発表者として参加されたスカイ島におけるゲール語文化（言語・文学・芸術・民俗等）の国際学会の大会報告で、たくさんの画像をスライドや動画で紹介し、ゲール語文化研究の最前線の様子を生き生きと伝えて下さった。

一方、アンガス氏は、ハイランド地方における夢のような大学 UHI [The University of the Highlands and Islands]の実現に至る過程についてお話下さった。高等教育の可能性を大きく拡げる画期的な UHI のプロジェクトがスコットランドの辿ってきた歴史と分かちがたく結びついていることが指摘され、アンガス氏の祖国愛を見る思いがした。

お二人の話題提供はいずれもゲール語文化の研究・教育の現在をテーマにしたものであったが、筆者がミニ・ケイリーで紹介したゲール語の子守唄“Ba i ui o ho”も、1991 年に開設されたゲール語文化の普及活動 Feisean nan gaidheal に 5 歳の時から通っているというエディンバラ大学の大学院生ブリトンさんから教わったものである。彼女へのインタビューの録音を聴いた後、この子守唄を参加者全員で歌った。シンプルな歌詞と旋律ながらとても美しく、安らかな気持ちにさせてくれるこの唄が、物騒な事件や政治的混乱が世界各地で起こる中、祇園祭宵山当日の蒸し暑い古都に集われた皆さんに、一服の清涼剤を届けられたとすれば幸いである。（鵜野祐介　記）

◇要旨

Rannsachadh na Gàidhlig　2016 報告

岩瀬ひさみ

Rannsachadh na Gà idhlig（ラーンサハク・ナ・ガーリック　ゲール研究）は、スコットランド・ゲール語およびゲール文化に関するコンフェランスである。初回は 2000 年夏に Aberdeen 大学で開催された。言語、文学、歴史などのテーマで 3 つの基調講演と 61 の研究発表があった。この他に出版記念会やエクスカーション、ケイリーなどのイベントがあり、発表論文集が出版された。このスタイルは以降も踏襲され、2 年おきに Glasgow 大学、Edinburgh 大学、スカイ島の Sabhal Mòr Ostaig と続き、2008 年の第 5 回には大西洋を渡ってカナダの St Francis Xavier 大学で開催された。そして Aberdeen に戻り、Glasgow、Edinburgh を経て、今年は 10 年ぶりに再び Sabhal Mòr Ostaig（ソール・モール・オースティク）が会場となった。

Sabhal Mòr Ostaig はスカイ島南端近くの海辺にたたずむ、スコットランド・ゲール語を媒介とした高等教育機関である。現在 the Highlands and Islands 大学のカレッジの一つをなす。学内では原則としてゲール語が話される環境であり、ラーンサハクを開催するにふさわしい。今回は 106 名がスコットランド、ウェールズ、イングランド、マン島、アメリカ、カ

研究ファイル

イギリスの住民投票からスコットランドの独立を考える

松下 晴彦

イギリスの欧州連合(EU)離脱の是非を問う住民投票が 2016 年 6 月 23 日に実施され、EU 離脱が 51.9 %、残留が 48.1%と僅差で離脱が選択された。2014 年 9 月 18 日のスコットランド独立を問う住民投票では、賛成 44.7%、反対 55.3%で否決され、スコットランドの独立はならなかった。大きな変革を迫られると、現状維持を選択する傾向があるということを示すものであった。しかし、今回の EU 離脱では、現状打破が上回ったことで、世界中に衝撃が走った。

EU 離脱は、イギリスらしいという気がしている。同じ島国ではあるが、イギリスは昔からヨーロッパ大陸との関係が深く、日本とは同質の島国ではないという研究がある。ただ、日本がアジアの一員であるという意識が薄いのと同じように、端から見ると、イギリスもヨーロッパの一員であるという意識が薄いように思える。例えば、BBC のニュースでイタリアから芸術品が到着したときに「ヨーロッパから輸入された」とアナウンスがされていた。イギリスは大陸ヨーロッパとは違うのだ、という姿勢が日常の端々に見受けられた。この点では、日本とイギリスには似ている所があると感じられる。だからといって、イギリスが EU 離脱を決めたというつもりはないのだが。

イギリスの EU 離脱が決定的になったのち、EU 残留票が多かったスコットランドに関して、独立問題が再燃するとの観測があった。イギリスから独立したスコットランドに対し、似たような独立問題を抱える EU の国々が EU 加盟を承認するのは難しいはずである。それでも、1707 年に条約を基にしてイングランドと平和的に連合を組んだスコットランドが、住民投票で平和的に連合を解消し独立を達成することとなると、武力に訴えて独立を求める地域もある世界に大きな希望をもたらすものと考える。

スコットランドの独立はスコットランド国内の住民投票では否決されてしまったが、実はイングランドではスコットランド独立を容認する人々の方が多い。イングランドの立法にスコットランド選出の国会議員が関与する一方で、スコットランドの立法にはイングランド議員が関与できないという不公平感がある｢独立をガタガタ言ってるなら、さっさと出て行け」と言われているように感じる。次回、スコットランド独立の住民投票を本気でするのであれば、イギリス全土で行うべきであろう。イギリスの EU 離脱と同じような結果が期待できるのではと思う。

（拓殖大学）

ナダ、ドイツ、アイルランド、チェコ共和国、日本から集まった。7 つの基調講演があり、63 の研究発表があった。計 70 のうち 29 がゲール語論文である。国勢調査に基づくゲール語の現況報告、アクセント記号の変遷、クリアランス再考、オガム文字の近代までの事例報告、子ども向けゲール語書籍出版プロジェクト、ゲール語チャップブックなど、興味深いさまざまなテーマが提示された。比較として今回の発表では過去のラーンサハクの研究発表のテーマと使用言語を、出版された論文集のタイトルをデータとしてざっとグラフにしてみたが、回を追うごとに、言語関係の発表が多くなり、ゲール語での発表も増加傾向にあることがわかった。

私の関心事である民俗学関係は多くはなかったが、Canna 島へのエクスカーションで、ゲール語歌謡と民俗のコレクターで民俗学者の John Lorne Campbell と Margaret Fay Shaw 夫妻のアーカイブを訪問できたことはすばらしかった。私は「The Eachrais ùrlair & the Hen-wife」の題で昔話に登場する魔女のようなキャラクターについて発表した。

Sabhal Mòr Ostaig は辺鄙な場所にあり、Edinburgh など都会の大学のように夜によそに出かけ行くところがないため、毎夜、学内バーが開かれ、音楽や会話を楽しむことで、参加者の間に親密な雰囲気が築かれていった。ラーンサハク終了後の金曜日の夜にはケイリーが行われ、大いに盛り上がった。二年後の次期開催校は未定だが、再び大西洋の反対側で開催される可能性がある。（外国民話研究会）

実現した夢―ハイランズ・アンド・アイランズ大学構想の概要―

ノーマン・ジェイムズ・アンガス

ハイランズ・アンド・アイランズ大学[UHI]は高等教育機関として 2001 年に開設され、2011 年には総合大学の設置基準を満たすと認められた、地理的に遠く離れた 13 の場所にキャンパスを置くユニークな大学で、その設立は、スコットランド国民にとって、1998 年の国会開設と並ぶほどの意義深い出来事である。本発表では、1. UHI 構想の実現に到る 20 世紀初頭以降の文化的・政治的・言語的な背景の考察、2. 17 世紀に遡る UHI 構想の歴史的淵源、3. UHI の組織・体制上の特色、4. 2 つの革新的プログラムの順に、UHI 構想の概要に迫っていった。UHI が国際的な注目を集めている理由は以下の点にある。① UK 全土の 1/5 を占める広大な地域に点在している過疎社会に暮らす人びとがハイテクの通信技術を用いた教育を受ける機会を可能にしたこと、②「絶滅危惧言語」であるゲール語の普及やゲール語教育の開発に取り組んでいること、③ゲール語能力の獲得を職業選択の可能性の拡大に結びつけたこと、④約 4 万人の在籍学生のうちパートタイムの学生の割合が全体の 35 ％と非常に高いこと、⑤1000 を超える履修コースが設けられ、多様な地域性とその特殊性の持つ利点を生かしたカリキュラムが用意されていること、⑥各地域が抱える経済的課題を克服し新たな展開をもたらす専門家を育成することで地域社会の活性化（エンパワーメント）を図ろうとしていること――。

現在、UHI は EU をはじめとする各種の組織・機関や財団の支援を受けて運営されており、財政基盤の安定化が求められるが、「21 世紀型のヴァナキュラーな（土地に根ざした、土地固有の）大学」のモデルケースとして、UHI の取り組みは今後も大いに注目される。（京都橘大学、要約：鵜野祐介）

◆2016 年度第 2 回研究会
日時：2017 年 1 月 28 日(土)　15:00 ～ 16:30
場所：拓殖大学文京キャンパス　教室未定
（東京メトロ丸ノ内線　茗荷谷駅下車、徒歩 5 分）
発表者：三原　穂氏（琉球大学）
論題：社会発展段階説と『オシアン詩』（仮題）
※今年より会計年度の区切りが 4 月になったため、第 2 回研究会となります。なお、会場を提供してくださる拓殖大学の諸事情により前週の 1 月 21 日(土)になる可能性もあります。

◆日本スコットランド協会(JSS)
◇JSS カルチャー講座　第 6 回
「なぜ日本ウイスキーはスコッチタイプになったのか？～日本とスコットランドの深い関係～」
日時：2016 年 10 月 29 日（土）18:00 ～ 20:00
場所：うすけぼー南青山店　　Tel: 050-5786-7385
　東京都港区南青山 5-4-31 B1F
講師：三鍋昌春氏
会費：会員 3,500 円　一般 4,000 円
　（ウイスキーテイスティングと軽食付き）
申し込み期限：10 月 21 日（金）

◇JSS サントリー白州蒸溜所・ウイスキーツアーテイスティング付きの特別セミナー
日時：2016 年 11 月 13 日（日）13:00 ～ 15:00
場所：サントリー白州蒸溜所
　山梨県北杜市白州町鳥原 2913-1
会費：無料
申し込み期限：11 月 4 日（金）
※現地集合、現地解散です。白州蒸溜所入口に 12:50 までにお集まりください。

※問い合わせ・申し込みは JSS 事務局へ
Tel & Fax:03-6380-5256　E-Mail:

◆日本ケルト学会
◇2016 年度大会
日時：10 月 22 日（土）12:30 受付開始、13:00 開会
　10 月 23 日（日）9:30 受付開始、10:00 報告開始
場所：静岡県立大学谷田キャンパスはばたき棟 3 階第 3 会議室（JR 東海道本線草薙駅、静岡鉄道県立美術館前駅下車、徒歩 15 分）
問い合わせ：米山優子氏

◇東京研究会
日時：2017 年 1 月 21 日（土）14:30 ～ 17:30
会場：慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎 2 階中会議室（東急東横線、東急目黒線、横浜市営地下鉄グリーンライン日吉駅下車、徒歩 1 分）
報告者：吉田育馬氏（明治学院大学）
問い合わせ：辺見葉子氏

日本カレドニア学会 Newsletter 第 57 号
2016 年 10 月 1 日発行

編集発行人　日本カレドニア学会代表幹事　照山顕人
http://www.ne.jp/asahi/caledonia/jcs/
事務局　〒168-8626 **東京都杉並区久我山 4-29-23**
立教女学院短期大学　小林麻衣子研究室
Newsletter 編集担当　江藤秀一、野口英嗣、米山優子
（連絡先）〒422-8526　**静岡市駿河区谷田 52-1**
静岡県立大学　米山研究室
E-mail